

回顧録

教育文化学科の昨日

井上勝也[†]

始めに

私は1954（昭和29）年に文学部文化学科文化史学専攻に入学し、3年次に教育学専攻に転専攻し、大学院は哲学専攻で教育人間学を研究しました。

当時の同志社は戦後10年という時代背景の中で木造校舎が目立ち、学生たちに貧乏学生が多く、生協食堂の10円の素うどんで我慢しながら、しかし彼らは意気軒昂でした。御所の芝生に座って青春を語り、戦後の日本を背負って立つプライドをもち、国家の将来を情熱的に語り合いました。

国家主義と民主主義

我々の世代は第二次大戦中に国家主義、軍国主義の教育を徹底的に叩き込まれ、人間の命は羽毛のように軽く、天皇や国家のために自分の命を潔く捧げることを求められました。ところが敗戦になってそれまでの価値観が音をたてて崩れ去り、羽毛のように軽い筈の命が地球よりも重いと言われ、国家主義に代わって民主主義が我が国の政治や教育の中核概念になりました。私は小学校の6年間に二つの全く異なる価値観を教えられた希有の世代です。このような貴重な経験をもつ当時の学生は、大学では教授の講義をいちいち疑ってかかり、教授の執筆した書物の内容を吟味し、自分で咀嚼してからでないと受け入れない傾向がありました。それは戦時中軍国主義のお先棒をかついで学生を戦地に行くことをアジリながら、戦後は何の自己批判もせず平和主義者の顔をして教壇に立っている教師が日本中に沢山いたからです。

当時同志社の教授の中には戦時中特高（特別高等警察）につけねらわれ、治安維持法違反で検挙されたり、学徒出陣で戦地に行き、九死に一生を得て帰還した人たちがいま

[†]1954～1961年在学，1961～2004年在職

した。彼らは何が真実であるか、どのようにすれば真実を見抜くことができるかを自分の体験にもとづいて熱っぽく学生に語りました。

創立者 新島襄

新島襄は1875（明治8）年に同志社英学校を創立しました。そして1888（明治21）年に「同志社大学設立の旨意」を全国に発表し、同志社で「良心を手腕に運用する人物」「自治自立の人民」「一国の良心とも謂ふべき人物」を養成することを天下に公言しました。新島の遺志を受け継いだ人達は万難を排してその実現に努力しましたが、1945（昭和20）年までの70年間は建学の理念が国家の教育方針と摩擦や衝突を起こし、推進者は極めて困難な茨の道を歩むことを強いられました。ファシズムの嵐が吹き荒れる昭和10年代の同志社は荒波に翻弄される小舟のような状態になりながらも、やっと主体性を保ち続けたといえます。

私の学生時代

私の学生時代である1950年代後半の同志社では水曜日の2講時を全学休講にしてチャペル、アッセンブリー・アワーを入れ、全学部で「宗教学」を必修にしていました。当時の文学部は英文学科、文化学科、社会学科によって構成され、文学部の教員の多くは戦争中の試練に耐えてきた人たちで、同志社の伝統を守ろうとする意気込みが旺盛でした。

文化学科

私の属していた文化学科を例に挙げますと、哲学・倫理学、教育学、心理学、美学・芸術学、文化史学、国文学の各専攻は専門に埋没することなく、6専攻の中心科目を1つずつ必修にして文化学科の全学生に履修することを求めました。学際性（interdisciplinary）を重視し、木を見て広く森を見ることのできる人間の育成を目ざしていました。また文化学科では6専攻が別々に卒業論文の発表会をするのではなく、一堂に会しておこなっていました。学生に他専攻の優秀な卒論を聴かせ、視点の違い、アプローチの違いの重要性を認識させることが目的だったのでしょう。

教育学専攻

私の教育学専攻ではバスをチャーターして京都の郊外や奈良の名所旧跡を巡り、お寺で合宿をし、境内でフォークダンスをやったことを懐かしく思い出します。要するに教場を教室に限定することなく、寺の本堂で「キリスト教主義教育は如何にあるべきか」をディスカッションし、教師と学生が寝食を共にして人生観や学問観を語り合いました。それは学生の内発性を刺激して、彼らが自力で真実を見出し、問題の解決ができる人間、新島のいう「自治自立の人民」の育成を目指していたのです。

1960年代の高度経済成長期

戦後十数年が経過し、我が国の経済の復興は目覚ましく、各企業は高等教育を受けた人材を大量に求め、大学の大衆化が進み、大学への進学率が急速に伸びました。1955（昭和30）年の大学進学率が10.1%であるのに対して、1960年には10.3%、1965年には17%、1970年には23.6%と戦後のベビーブームで生まれた子どもたちが進学年齢に到達したことも一因になりました。その結果、大学とりわけ私立大学が増え、学生増に対して教員を増やすことなく、教室を増やし、大教室によるマスプロ授業を日常化し、学生たちは硬直化したカリキュラムやマイクによるマンネリ化した授業に不満を訴え始めました。

60年安保闘争

1960（昭和35）年のいわゆる60年安保闘争は戦後最大の反政府闘争で、労働者と学生が国会を取り巻き、とりわけ全学連は組織力と動員力を誇示しました。その後学生の政治活動は党派別の色彩を濃くして、セクト間の対抗意識や運動の主導権争いが顕著になっていきます。

1960年から16年間も続いたベトナム戦争は欧米の大学で激しい反戦運動を引き起こし、日本では北爆が開始された1965（昭和40）年頃から全学連やベ平連による反対運動が活発化しました。

大学紛争

1968（昭和43）年から1969年を頂点にして、日本中に大学紛争の嵐が吹き荒れまし

た。アメリカに端を発する大学紛争は燎原の火のようにヨーロッパからアジアに広がり、日本ではベトナム反戦運動や沖縄返還や基地問題をめぐる反政府運動に発展し、合せて個別大学のかかえる問題－学園の民主化、学費値上げ反対、学生の管理体制、同志社の場合は田辺校地移転、学生会館や寮問題－と結びつき、前述の大学の硬直化やマスプロ教育への不満が顕在化しました。新左翼或いはノンセクト系の学生集団が授業を阻止し、大学の秩序を否定し、大学の解体を含むラディカルなスローガンのもとに激しい運動が展開されました。同志社も1969年から授業が断続的になり、同年9月から12月の3カ月間バリケード封鎖のために大学名で「当分の間全学休講とする」の掲示が出されました。

学生の鋭い批判

大学紛争中、文学部教授会は学生たちとたびたび団交し、深夜に及びました。彼らが我々教員に突きつけた言葉で私が40年以上たった今でも強烈に思い出される批判の言葉に次のようなものがあります。「お前たちは知識の切り売りをする専門馬鹿だ」、「我々はお前たちの命をかけた授業を聴きたいのだ。我々の魂を揺さぶるような授業をせよ。毎年同じノートを使い、マンネリの授業をするな」、「教師たるものは学生に向かって誠心誠意全力投球しろ」。学生たちは教師の主体性をかけた血の通った、温かみのある授業を求めていたのです。私のような30歳台前半の教員には、学生に鋭い短刃を突きつけられたような感じがしましたが、旧制大学出身のエリートを自負するお年を召した教授の中にはラディカルな学生に土足で踏み込まれ、プライドを踏みにじられて茫然自失、夜も眠れない日々が続いたと言われました。

大学紛争は古い体質を残し、学生を管理しようとする大学と、戦後生まれで自由を享受する学生の衝突であり、彼らの欲求不満の爆発であり、大学の無策が引き金になりました。当時の国内外の政治・経済状況も紛争に拍車をかけたといえます。

1969（昭和44）年8月の「大学の運営に関する臨時措置法」が成立するに及んで、大学紛争は全国的に急速に終息に向かいました。しかし同志社大学ではその後も数年にわたりセクトの対立や内ゲバ、期末テストのボイコットや卒業式の妨害といった形で教員と学生、大学と学友会の間に根強い不信と対立が続きました。

1969年11月、文化学科では川島秀一教授、望田幸男教授と私が中心になって、「大学改革への基本姿勢を確立するために」と題するパンフレットを作成し、教員間の共通認識を高めるための材料を提供しました。現在読み直しても改革への高い理念と真摯な姿勢がうかがえます。

紛争の終息後は文化学科でも大学改革への意識が冷めていきました。1970年代に入

ってカリキュラムの改革を始めプラクティカルな改革を各専攻で何度か取り組みましたが、その結果専攻単位で学生の要望に応えようとしたために、文化学科共通の意識が希薄になり、自ずと専攻の壁をつくることになりました。学問の分化や専門性の深化が背景にありました。

専攻から学科へ

3学科10専攻を擁する肥大化した文学部を解体再編して、時代の要請に応える新しい文学部を構築する検討作業が歴代の学部長のもとでとり組まれました。10年以上に及ぶ検討の結果2005（平成17）年に社会学科4専攻が文学部から独立して社会学部を構成し、合せて全ての専攻が学科に昇格しました。教育学専攻は近年の社会科学的アプローチによる研究・教育の動向を踏まえて、文化学科から独立し、教育文化学科として新しい社会学部に加わることになりました。「人間とは何か」「教育とは何か」を人文科学の視点から長年研究してきた教育学が、人間の活動や教育を社会現象として捉え、実証的方法によって研究する学問に変質してきたことが、社会学部に加わった理由の1つです。学問の分化、発展の傾向からけだし自然であったと思われれます。しかし私は、教育学が「人間とは何か」という根源的な問題の探求を欠落させて、社会現象面からのみアプローチして、人間の行動を数値でもって示すことで人間の本質の把握が可能になるとは考えません。生きた人間の本質を探究することは社会学部においても軽んじられてはならないと思います。

終わりに

世界的にグローバル化が進み、輸出大国であった日本は超円高で安い労働力と市場を求めて海外に進出せざるをえず、産業の空洞化が見られます。現在の学生は「草食系」という表現でその特徴が示されるように、同志社でも留学を志望する学生が往年の半分に減りました。その理由は就職が厳しく、就職活動が3年次にずれ込んでいるためだけではありません。彼らが留学にともなう厳しい勉強を避けるためだといわれます。もしそうなら日本の将来のために由々しき問題です。

創立者新島襄は幕末に生命を賭して先進国へ赴き、近代科学を学んで日本の近代化に貢献しようとしていました。建学の理念に国際主義を掲げる同志社は創立時からグローバルに活躍する人物の育成に力を注いできました。今後の社会学部は同志社の伝統を受け継ぎ、活力を失い、ビジョンのなくなった日本を再建するために必要なリーダーの育成を目ざし、中味の豊かなコミュニケーション能力を持ち、世界的規模で活躍しうる卒業生

をより多く輩出していただきたいと思います。

追記：あのラディカルで戦闘的であった学友会が2004（平成16）年3月に自主的に解散しました。大学紛争を体験した者にとって隔世の感ひとしおです。